競奇遊聞

一

遠門 1449 1

競奇遺聞序

夫史之記事也使其傳于後世或自百世之下知百世之上是以使當時之事炳乎紙上者除書又何從邪梅翁先醒集古之異事而抄其要分十有八篇其文從約總成五卷名曰競奇遺聞因需予序予閱之是幾剪燈新話之流乎亦

足以廣人之知見者也且書肆顧舊堂
主人謂予曰我邑刻文字者自古所未
曾有也聿遭文運之化而
賢尹施仁政于下恩澤無所不及矣因
請刻書之事　宦可之乃先刻此書
是我邑刻書之鼻祖也予亦喜我邑刻
書自此往々而有之矣不辭其需因冠

數字其首其取笑於大方君子者亦其
所矣
文化癸酉二乙丑夏五月
伏瞻　山中辰仲龍撰

競奇遺聞　目錄

第一卷

都藍尼
阿古野松
深砂大王
繪馬神
金烏玉兎集
殘夢長壽
淨藏貴所

第二卷
禁把戒邪淫僧尼
第三卷
田船漂流
第四卷
天狗
巨勢金岡
生馬仙人
唐船漂着

第五卷
陽勝仙人
道場法師
小野篁
申樂
赤山明神

競奇遺聞　巻の一

都藍尼

都藍尼は和州の人なり仏法を精修して能く仙術を学ぶ吉野山の林藪に居して世に絶つ今葛城山笑金の地令別龍王菩薩これを護る婦人の近る事を容さず都藍いふとも女身なりといへども毒戒壇威豈凡女の族か比せんやとて令葛城山に忽雷電晦冥して迷て路を亡し持所の杖を棄て其杖おのづから殖て大樹となる都藍又龍を呪して山に昇る縁の影に到る

進び事を得て都堂嶮〻岩窟を踏て皆〻くゝ
巡る共況を奏し池嵩下ふかり山二ツの祠今当存ぶ
世ふゝ長生の道況得て其終る所を志ぶ況八十一
鱗九九の数〻一三五を九〻て老湯の雄変もるゝあし
葉公龍を畫て〻況弘ゝる費長房八竹の杖を菖蒲年
投れハ化〻て龍ゝる数

汗古野松

一條院御宇中将藤實方不敬ふ座ゝ〻て奥州ゝ
下〻せゝる事〻ゝ和歌の名所を尋〻て ゝ杖と

なゝぬゝ古歌の杖を尋るに紀人好一人の翁ゝて実方
ふゝふゝの古歌の松ハ出羽ゝ出ゝふゝり奥羽ハむ〻一州ゝて今ハ二郡
ゝ聖ゝり実方羽州小郡ゝて ゝ古歌の杖を尋ゝ翁ハ姫竈
四郡ゝ生ゝ後実方馬ゝ乗て出ゝ道の傍ゝ一社ゝゝる人
ゝ古れ奥州名取郡笠島の道祖神ゝ行人多ゝ馬ゝ
下ゝ実方問ゝ古れいづゝの神ゝ是ゝ古れハ王城加茂ノ西
一条の小出ゝ路道祖神の娘ゝ密ゝ高人ゝ通ゝ事ゝ
故ゝ放逐せゝれてゝ国ゝ来ゝ州人祭祀ゝ祷る者陰相と
造ゝ神ゝ掛ゝ霊験ゝ今中将浦をいの

経(なを)實方云給る則ち出れ下品の女神なりけるぞ馬うりかんや
と行ふ実方の馬像に斃ぬ実方もまた死て園てに社
乃例に葬るを霊化して雀となりて死来り王城北西
勧学院に飛鳴そしぬ

深砂大王

泄神と流支三蔵天竺より一切経を持て渡るとき
跋沙を渡る事一度難しいくせんと云に此神
忽怒して現じ船筏をくつがへしやそくせむ
泰山府君も称ぶ社と日光神橋の向ひ小高額ハ
大明院一品准后法親王の御筆之本地毘沙門天神橋
ち渡るに又大坂難波村天王の神宮寺を深砂寺と云
又碑碣の境内小深砂大王の祠なり通称大小辯条を

繪馬の神

道公法師天王寺に居て法華を持ち事なり
曾て熊野に参詣ふ安居に夏籠て本寺に還るに書小一村を
過て居宅るに大樹の下に宿るに衆半計に騎馬の老
三十餘人樹下に到るを人〻で云義をりやいかぞすくと
いかぞ名や答て馬足損じて答ふる何ぞ老義て

徒を歩のして終らんと欲る時且小道公怪んで
樹下の巡りを見るに小神祠あり其像朽弊る又赤の
行板の上小馬形を圖しるるあり赤足の所々板
破損し道公とかち糸をとりて整補し神の言を
試んと欲して次の乘尚樹下小宮に乘せ小赤毬まりて
又呼び馬小乘りて出程なく曉小向ひて翁坂まつく
謝して云師の賜を羨て馬御なる幸小逢ひといそ
年暗を出して道公小飯して道公問て先の教誡の今を
義言くなるとして行疫神形り神管内を巡り小れ

前驅を為て出ざれば必答を弄て罵詈今師の恵を蒙り
て毒蟲小所々師小もむるあり山身小驅四刻を
受る事一無量之頃ハ師山樹下小居て三束三日妙法
蓮を誦し我劣報拙して淨妙見を拝ませよ道公
所を憐んで三日誦経し蓮四日小神頭面を出し
仏禮して云師の慈力小よりて補陀洛迦山小生し
訳世音孔眷屬となる事を切半り頭ハ師山木草を
とりて船とし我木像を刻て海上小浮め道公
教のごとくして海小浮む微風も起ず小忽南を

さして馳行き一夜あるに其東村里の老ザ夜
ゝる樹神ぞらの夜相ゝるして金色の光の照耀と
しつゝ南方ゝ飛去るゝと道公寺ゝ詣つて語ゝ聞老大ゝ
嗟嘆さて

金烏玉兎集

陰陽家ゝ一書あり名づけて金烏玉兎集いゝ又
簠簋神裡傳ともいふあれ安倍博士晴明朝臣勅を
奉て陰陽を占い雲中の穴を消を正々位絶殿陛
ゝ登り陰陽博士主計権陰少允ゝ初免晴明法西ゝ
越免薩州ゝ發船一支那ゝ往く雍州ゝ登り荆山
ゝ伯道と云ふ人ゝ自云文殊大士の天理を得ゝ
晴明就ゝ教を学ぶ一壺の書ゝ與ふ文殊裏書
陰陽内伝集と云ふ晴明受て本邦ゝ帰り秘し
石匣の中の簠簋ゝ藏て用ざ年日久し晴明が
弟子道満ゝ私を欲と欲ども得ず道満私ゝ
晴明ゝ妻妾梨花ゝ通ひ晴明あれを去て梨花
ひそゝ道満ゝ通ふ道満ゝ心即かの書を写して封秘る
こと故のゝ一日道満晴明ゝ云ふ晴明ゝ文殊

松堂寫

遇く秘書を給ふ其名を金烏玉兎集といふ天地陰陽の数を裡みるごとし晴明云予もしも伯道師小徒ふく此書をはらり秘して簠簋あり故小予号を改く夢ハ妄想倒へ金玉ををきるとなりやあ汝ぞ夢ハ妄想倒へ金玉をはるとなるを覚ふ中小五平道満碁争して遂小頸をかられん事を賭ふ五平道満手を出して時の頸を截らる時小荊山の矢小今ハ伯道られを怪んく穀成山小大山王秘法を行て晴明

死る事を知り則泰邦小渡く人小為く晴明の墓小ゐるこを哀慕して遂小墳を築く殺を集め皮肉を御ひ骨節を繕ぐ生活續命の法を修る晴明蘇生る伯道おんく快然して小ふ於て伯道道満ぐ宅小まく向て云晴明草や吾道満答く いみ〳〵其人ハ今ハ墳墓ゝるを伯道云ハれ其人竹林の中小ゐる事を知るを汝ゐ事を道満争して晴明為生ばゐ頸を刎ん事を賭ふせむ伯道云汝争や吾晴明死して已小久し世の人ハ

初て来し相伴して時所出来る道満大小驚く
遂に自頸刎く歩次

残夢長寿

奥州小野義とて者自字して呼白と云号を
秋風と人と称し俗形を風顛狂れ
男子一休を友とし禅要を好て又時く人と語る
五一元暦文治の事を語て或を時義経ハ
何るを知し無芸を事を誰ハけるを次
平氏と某が戦て話殆親見人の若のごと

人怪んでこれを語るを聞て忘れて
傍の天海及び杉雪と云者義小偶て残夢常
小好んで拘杞飯を食し天海もまた事を勧次
人と語て云残夢長生の事を速小びて拘杞
を服する也人怪んてかと八蓋常陸房明人や
天海と又拘杞を食し意小任を付小陸ひく
急て好る事一ならず速て緩を怪く
これ寿命を延る事と生と云とぞ亦若狭國小白比丘
尼と云る老婆ありこれ父一且山小入く異人小偶て

終ニ一廣ニ到ラヌ殆一方地ヲ別世界ニ生ル人
一物ヲ知テ云是人臭ケレハ人ヲ食ラヒ紀八年ヲ
延考ヒビヒトツ又推テ都ニ留ル其ノ女子迎ヘ入テ
衣帯ヲトラレ人魚ヲ袖ノ裏ヨリ出テ則食サ
シムヲ女四百余年ニ成ル白髪ヲ尾ヤ子ヲ
越前ニ留ル大男トナルヲ方時浄山ニ入ル
本ヲ伐ラヌ渭基ニ大樹ノ孔ヲ穿ケ
源ノ定国ニ水ヲ与ヘ流レヲ飲
其味清冷ナリ

数百ノ毒ヲ好ラ

浄蔵貴所

浄蔵貴所ハ三善教信卿ノ第八ノ子洛西
ノ人寛平三年ニ生ル母ハ嵯峨帝ノ孫女浄蔵
生ル日四果ヲ千字文ヲ誦シ一ヲ聞テ十ヲ知ル
聰明絶倫ナリ七果ノ年ニ父ノ命ヲ受テ
小野ニ浄蔵法人ヲ訪テ一枝ヲ折テ父ノ呈ス
父大ニ幸ヒトシテ浄蔵稲荷山ニ修行ス神童多ク
出ル紀州ノ海ヲ渡リ仙人ヲ

船を出まる處山ふ出て立昭の寺ふ入る僧の長秀
ふ入り波斯國より渡来し胸痛を患ふ淨義
あれを呪して已しむ長秀嘆して曰亟國ふかくの
かなさ異人ふ逢ひ淨義後ふ書を裏く二ふと生む
名を布施伊能と云ふ布施能の二氏
後ふ於て天暦年中八坂塔傾斜し甚方ふ
ひろまる淨義王城ふ向ふ宮人驚駭て憂ふ
淨義ふ問れを祈ふ微風吹来く宝澤ふ変ひり
あふ能く堵急ちふ湯を出す人ふる外異ふて

淨義二ふを勝の上ふ座せ一夜暗川ふ入て持義し
須臾ふして河水逆流ふ又儀ふ梳の実ふ紀
ひり二ふ出れをうんと驚て淨義呪をれば梳自ら
死る淨義八坂寺ふ寓る府東盗多く入る淨義
ふれを叱も賊多成麻本して揺ぶ旦ふ呪縛を解し
盗人礼を乞て去る父の書行率次淨義熊野
より軍て上洛を檜ふ一條堀川ふて偶ふ淨義
止あ〻蘇生さしむ此所を房り掘ふ凡奇異
志駭〻牧峯ふ〻次淨義八坂塔の人ふ

学問外を兼影響小説り悉曇天文易筮醫
卜結管音律文章伎芸ゝる賢ゝ掛して技巧に
康保元年仲冬ゝサ一日東山雲居寺小趙に書

七十四

競奇遊囲　巻の一終